

秋山日出夫 コンク - ルの神様のH話

青木八郎（作曲家・指揮者）

後年、合唱コンク - ルの入賞を数多く重ねた神様、秋山日出夫氏に初めて会ったのは終戦の翌年の昭和21年、場所は私が指導していた「砂山合唱団」の練習所の小学校の音楽室。

赤ら顔で額が広く長身、当時食料不足で誰もが痩せているのに中年肥りで、何と兵隊服や国民服という戦争の名残りを皆が着ている時代に灰色の背広姿で颯爽と現れた。

明治38年生まれというからこの時42歳。生まれたのが日露戦争の日本海海戦、東郷艦隊がロシア艦隊を撃沈した年のせい、この先生は元気良く多弁であった。

初めに私は合唱団を磨き上げる「旋盤工」だと名乗った。若い頃工業学校で学んだのに懸けているわけだ。

昭和10年に男声合唱団、「東京リ - ダ - タ - フェル・フェライン」の設立に参画、その主宰者で指揮を続けてきたと滔々と話される。

その話し声も綺麗だったが、何の曲か忘れたが1曲歌おう、と言われて日本歌曲を皆の前で歌って聞かせたのが絶品だった。髪が後退した広い額の真上辺りに当てられたテナ - 声は、本格的で響きも良く、皆がうっとり聞き惚れていた。

その頃のお住まいが千葉県の、私と同じ船橋市。家の場所も近くなのでその後個人的にも親しくなり、いろいろ助言して下さる。

時々指導をお願いする私の合唱団の団員にもその人柄もあり、大変な人気だった。

そのうちに「リ - ダ - タ - フェル」は栄光ある活動を終えたので、新たにそのような男声合唱団を創ろうという動きが出て来た。

それで「H・G メンネル・コ - ル」という男声合唱団が指揮は勿論秋山氏で結成されたが、その中心は砂山合唱団の男声陣だった。秋山氏はこの合唱団を徹底訓練の上、合唱コンク - ル全国大会に連続優勝3回の金賞を獲得、日本一の男声合唱団に仕上げる。

彼の率いるこの合唱団の冠の「H・G」とは、ご本人の髪の後退した広い額、つまりは、「禿」から取ったのだとご自分で笑って言われていた。「メンバ - 全員が禿るまで歌い続けようという誓いの証明なのだよ」とも付け加えた。その「H・G」は今日も元気で、初めて一声を出した船橋市の練習所で毎週歌い続けている。メンバ - の何人かが本当の「H・G」になったかは確かめてはいない。

さて、この合唱団ばかりでなく、秋山氏が合唱コンク - ルで優勝をさらっていたのは枚挙にいとまが無い。

一般の部「混声」では千葉市の「若草合唱団」も2回程、そして「職場の部」では東京都の「運輸省合唱団」(旧・国鉄合唱団)はこれも連続3回も日本一にしている。

その他、「産業合唱コンク - ル」では、参加した彼の指揮した職場全部が「優秀賞」を獲得してしまうという次第だ。

そのようなことで「神様」といわれたわけだが、ある時、この先輩にコンク - ルに優勝する「コツ」って何でしょう、と聞いたことがある。すると即座に、

「それは課題曲を好きになることだね。」

とおっしゃる。

「それは指揮者がですか、団員ですか。」

「勿論、両方だね。ですがどちらかと言えば団員だね・・・、全員のメンバ - が好きになってくれなければ駄目だよ・・・。その為には練習さ。」

と、付け加え、

「課題曲を1万回歌った団体が1位、9,999回歌ったところが2位というわけだね」

実際のところこの指揮者の団体は課題曲に集中し、1万回はオ - バ - だが物凄い練習量であるとの定評があった。

そのせいか自由曲のレパ - トリ - はどの団体も以外に少なく、コンク - ルに参加する場合、他団体が前に歌った自由曲を盤回しして次の団体がやっていた。これも指導者がその曲についてすでに熟知しているわけだから、コンク - ル入賞の要領の一つであるといえる。

これは別に規則は無く、どの自由曲を以前にどこの団体が歌ったところで、同じ指揮者が次の団体に同じ曲を歌わせても文句は言えないのだ。

という訳で彼の振る自由曲は磨き上げられていて実に見事であった。

そのうちに、「秋山日出夫ばかりがコンク - ルの賞を独占している」などという声が聞こえてくる。嫉妬心からのやっかみだろうが、実際に実力で勝てないのだから文句を言う筋合いではない。

それよりもステ - ジの上の音楽性で必ず彼以上の成果を挙げ、その王座を奪取するのだ、と私は秘かに自分に何回か誓ったものだ。

しかしながら、それも遂にかなわず彼は昭和51年3月20日、病没、帰らぬ人となった。

社交性もあり話題も豊富な人だけに、当時の合唱界に衝撃をあたえ、その死を惜しむ声が多かった。

音楽雑誌や連盟の機関誌、その他の出版物に追悼文がいくつも載せられた。だが同じ土地に住む自分にはそうした原稿の依頼は来なかった。かえって同じ地区で活動する合唱指揮者として、先輩と後輩だが、一方ではライヴァル視されていたせいもある。それで仲が悪いのではないかと無責任に勘ぐられていた向きもあった。そのせいか秋山氏の葬式に参列したが、音楽関係者の私を見る目には独特な冷たさが感じられたのだ。

違う、それは違うのだ、彼の死によって一番淋しい思いをしたのは私なのだ。音楽上の目標を失い、張合いをなくしたのも、そしてその人柄に魅かれていたのもこの私なのだ。

好人物であつた秋山氏は多くの人々に好かれる方だった。誰とも話を合わせるし、話題は尽きないし、中でも男女間の微妙なH話が得意で、あっけらかんと口にする。これを混声合唱団の練習の合間にやるものだから、女性団員など大笑いさせられる。だが照れさせたり赤面させたりしないという独自のユ - モアのある話術の持ち主だった。勿論、男同士だとそれが一段とオクタ - ブあがるのだ。

「八つつあんよ、“ウンチ”と“ウンコ”とどっちが綺麗だと思うかね」

彼は私の名前を呼ぶ時、いつでもあの落語に出てくる長屋の住人「八つつあん」「熊さん」の「八つつあん」であり、公式の席ではその下に先生を付けて「八つつあん先生」という。

「そりゃあ、赤ちゃんの“ウンチ”の方が綺麗でしょう」

「でもさ、八つつあんよ、“ウンチ”っていうのは、なにかこう柔らかくて弱弱しそうですね。
“ウン”の方が硬くて丈夫だね。君のはどう考えても“ウンコ”だよ」
これはある飲屋で合唱団のメンバ - を前にしての一席。一同笑いが止まらない。
そのうちにかなりお酒が廻ってこられて、「八つつあんよ、あんた『へ長調』でどこまでできる
かね」

「なんです、それ」

「へ短調じゃ駄目だよ。これはやっぱり長調で明るくなくてはね」

といいざま、大きなオナラを3つ続けてした。

「あれ！！今日は調子が悪いな。いつもならド、レ、ミ、ファまで出るのだがな・・・」

一同唖然として、それから私が聞く、

「今のはなんです、すごい音だ」

「いやあね、練習を重ねるとオナラで音階が出来るんだよ・・・。いつもファまで行くのだが
ね。へ長調の途中までというわけさ。そのうちト長調まで上げて歌って見せるよ。残念、今日は
『ミ』まででカンベンしてね」

これには爆笑、あれからどのへんまで音域を上げられたのだろうか。

亡くなれる年の直前の「産業合唱コンク - ル」が東京・神田の共立講堂で開かれ、その指揮
台に秋山氏が立っていた。例によって大きく両手を広げて振り、時にはかがみこむようにして細
かく指示する指揮ぶりは安定していてよく歌わせ、他の団体に比べて群を抜いていた。

コンク - ルは終わり、会場の入口で顔を合わせる。

「どうですか、この近所で一杯やりましょうか」

と私から声をかける。

「いやあー、やりたいところだが、実は今日はこれから息子の住んでる横浜に行くんでね。健
康診断ていうのをやれっていうのだよ」

親戚の方が横浜で病院を開業されていたのは前に聞いていた。

「そういえば、この頃すこし痩せましたかね」

「場合によっちゃあ、八つつあんよ、これが最後かも知れんよ」

「悪い冗談、止めて下さいよ・・・」

「いやあ、診断の結果、入院ってことになったら、本当にそうなるかもね。見納めだからよく
この顔見といてよ・・・。大丈夫だよ、元気で帰って来るから。その時は一杯、今日は借りとく
よ」

と笑顔を絶やさない温顔で手を握ってくれたのだが、力が無く、その日は心なしかかなり疲れた
様子であった。

だが、それが本当に彼の私への最後の別れの言葉となってしまった。

短い入院生活の末、「胃がん」でこの一代のコ - ラス指揮のオ - ソリティ、秋山日出夫は73歳
で逝ってしまった。

臨終の最後の瞬間まで、彼はベッドの上で大きく手を振って、天井に向かって指揮動作を続け、
言葉にならない声をあげて歌っていたという。

いまわの際まで彼は指揮台に立って合唱団に向かって棒を振り、自らも歌い続けていたのだ。